

## 東京学芸大学連続講演会 第12回

### 「地球をスローダウンさせるハチドリ」の『ひとしづく』 ～アンニャ・ライトさんと語ろう、持続可能な未来へのビジョン～

#### アンニャ・ライト 氏

オーストラリア在住の環境活動家  
シンガーソングライター



#### なぜ環境活動をしているのか？

私の名前はアンニャ・ライト、地球人です。この20年間、私は環境保護活動を行なってきました。今から18年前、初めて日本に来ました。マレーシアのボルネオにあるサラワクの森、熱帯雨林の伐採を止めて欲しいと訴えるためです。自分たちのライフスタイルが環境にどのように影響を与えるか、そしてそれが他の世界の国々にどのような影響を与えるのかを知ったとき、私たちは自分たちの暮らしを変えるきっかけを得ることができます。このことをずっと考えて、そして訴え続けてきました。

人々はよく私に、「どうしてこんなに長い間活動ができるのか？途中で疲れてしまったり、もうやめたい！と思ったりしたことはないの？」と尋ねます。でも、私は決して他の誰かや環境保護運動のために活動をしているわけではありません。何より私自身のため、私の子どもたちのため、ここにいる全てのみなさんのため、そして自分の環境を守っていかうとする地球の一部として活動しています。

ですので、私にとって環境を守る活動を行なうことは、すごく自然なこと。決して、自分を犠牲にしているわけではないんです。自分の自然な責任として、活動しています。

いまからブータンの国王が世界に提言をした有名なGNH（国民総幸福）という考え方についてお話していきます。私はみなさんに、何がもっとも皆さんを幸せにするのか？ということについて尋ねてみたいと思います。私自身にとっては、「自由」であることが、私をもっとも幸せにしてくれます。自由に、創造的に、喜びを持って、この深刻な環境の課題にチャレンジしていることが、何より私にとって幸せを感じることです。

#### 大学卒業後、サラワクの森へ

この学芸大学に来て、私は自分が大学生だったときのことを思い出しました。

私は大学で演劇と音楽を専攻しました。人々は、何で法律だとか、その他もっと直接環境問題に関係することを大学で専攻しなかったの？と聞きます。高校生のとき、私はすごいフラストレーションを抱えていました。核戦争や環境問題に関する情報を、みんな持っているのにも関わらず、行動しないのはどうしてなんだろうって。

そしてそれはきっと、コミュニケーションの欠如が原因だろうと思ったんですね。だとすれば、お互いのコミュニケーションを促進することがいちばん大切だと感じたわけです。そして、私は高校生のときに自分の人生を決めました。「地球を癒す活動家になろう！」って。なので、大学に入って演劇や音楽を勉強したのは本当にいい選択でした。

大学を卒業した後、私はすぐマレーシアのサラワク（ボルネオ島）に行き、その森に暮らす先住民のプナン族の人たちを助ける活動を始めました。

彼らは、私が人生の中で出会ったもっとも平和で心優しい人々でした。彼らは、人間として生きることはどうということかを、私に教えてくれました。

私が育った社会では（日本もそうですが）、もっと強く競争に勝ってもっと攻撃的に生きることが良いとされています。欲望の文化と言ってもいいですよ。でもプナンの人たちの暮らしは、犯罪もなく警察も必要のない社会でした。

彼らにとって一番大事なのは分かち合うということでした。彼らは生活のすべてを森に依存し、森と調和して生きていました。

当時、マレーシア政府はこうした熱帯林の伐採を推進していました。そしてその木材の多くが日本に輸入されていました。

私は、そうした熱帯林の伐採に反対する活動をしたために、マレーシアの政府は警察を使って私を追い出そうとしていました。時にはプナンの人たちと一緒に、警察から逃れて森の中に隠れたこともありましたが、しかしそんなときでも、彼らと一緒に歌を歌うことによって、心を穏やかにして笑顔を持つことができました。

私はこうした経験から、声を通してコミュニケーションしていく音楽の大切さを実感しました。たとえ違う言葉をしゃべっていても、音楽を通じて私たちはここるところと通じあうことができます。なので私はいつ

も、講演ではなく歌と音楽を通して、みなさんとコミュニケーションし、そしてメッセージを伝えてきました。

### 熱帯林情報センターでの活動

その後、私は日本に来て、この熱帯雨林伐採の課題を日本の人たちに伝える活動を始めました。

そして私が日本に来て気がついたこと。それは子どもたちの遊び場がないことでした。日本はすごい経済発展を遂げて、ビルや道路はどんどん造っているのに、子どもたちの遊び場がない！ これは、未来の世代を忘れてしまっているということ。私にとっては、森林破壊の問題と同じくらい重大な問題のように感じました。

私自身は、子どもを持つことが自分をスローダウンさせるとしてもいい機会になりました。

私たちは仕事やこうした活動の中で、ついつい自分のペースを忘れてファーストな生活になってしまったりしますが、私はパチャとヤニという2人の子どもを持つことによって、自分のペースに戻ることができたと思います。これは、日本のような社会ではとても大切なことです。

私はいろいろなグループに関っていますが、その中でもメインで活動してきたのが「熱帯林情報センター」(オーストラリア)です。この団体のスタッフとして、10年前からバブアニューギニア、インド、エクアドルの3カ国で、森林に住む先住民族たちの自立を助ける活動を始めました。そして1997年に、実際にエクアドルの方に移り住んで、現地で活動を始めました。そこでは、まさに私はスローダウンすることを学びました！

### エクアドルでの持続可能なコミュニティづくり

エクアドルはコロンビアとペルーの間になる南アメリカの国。ガラパゴス諸島もエクアドルの一部です。

エクアドルは、世界でもっとも豊かな国のひとつです。でも、お金という意味ではありません。生命(いのち)、という意味においてです。とても豊かな生物多様性に恵まれている国です。次の時代には、私たちは富をお金の量ではなく、生物多様性の豊かさではかるようになるでしょう。私はそう信じています。

エクアドルで、何をもちて貧困と考えるか、その指標についてひとつ発見をしました。私はインタグ地方の草の根の人たちと一緒に活動していました。エクアドルは、国際的には途上国、貧しい国として分類されています。いっぽう世界にある34箇所あるホットスポット(極めて生物多様性が豊かな一方で破壊の危機に直面している地域)の内、2箇所がエクアドルにあります。

そうした地域が銅山開発によって影響を受けています。インタグの人たちは、この銅山開発に強く反対をしています。開発推進側は、道路や病院建設などの生活改善を行うとして銅山開発受け入れを住民に迫りました。でも住民たちは、開発を受け入れれば自分たちが生活を依存している森を失い、生計手段を失うことになることを知っているため、開発に反対しています。

そんな中、日本の「ナマケモノ倶楽部」などとの連携によって、無農薬コーヒーを生産するなどの活動が活発に行われています。環境破壊型ではないオルタナティブな経済を私たちは見つけていかななくてはなりません。

エクアドルでは、おかしなことに政府や国際機関の統計では、自活して自立して生活している人が「貧困」だと見なしてしまうことがあります。

例えば、貧困を測る基準として“自宅出産しているかどうか”というのがあります。「お金があれば病院にいけるから」という理由からなんですね。さらに、エクアドルでは病院で出産した人の実に8割が帝王切開で出産しています。南アメリカ全体で、帝王切開の割合がすごく高いんです。

なぜか？ そのほうが病院が儲かるからです。医者は、帝王切開をしないと赤ちゃんが危険だと言うわけですね。それでお母さん達は、お医者さんが言うならば、とって帝王切開してしまう。もともと地域にあった伝統的な医療や薬草を見ずに、お金のかかる近代医学にどんどん頼ってしまっているわけです。

私が住んでいたエクアドルのコタカチで、「自宅で赤ちゃんを産む」って言ったときに周りの人たちはすごく驚いてショックを受けていました。「そんなにお金がないの？」って言って(笑)

でも、実は9割の女性が自宅出産ができる能力を持っているんですね。私は、自宅で出産することによって、自分が女性として健康で問題がないということを示したかったんです。

自分で健康で野菜をつくって、食べる。これはまさに豊かさの印であって、貧困なんかでは決してないはずなんです。

### 「貧乏ロハス」のススメ

いま、LOHAS(ロハス)という言葉がとても流行していますね。でも、ここで私は「貧乏ロハス」という新しいアイデアを紹介したいと思います。

なぜ、エコロジカルであるためにそんなにたくさんのお金をかけなければいけないのでしょうか？ エク

アドルでの実践では、あんまりお金を必要としません。シンプルな暮らしと、誰でもアクセスできる優れた技術を用いて、生活に必要なものを全て満たすことができます。

こうした“貧乏口ハス”を実践すれば、「お金を稼がなくてはいけない！」という強迫から解放されます(笑)

熱帯林情報センターも、ボランティアベースでずっと活動を行っていますし、エル・ミラグロでの活動も、世界中からやってきた100人以上のボランティアによって支えられてきました。

通常、先進国による援助プロジェクトは、巨大な予算をかけて現地の状況に合わない最新技術を導入するようなものが多いですね。

でも、そうした援助の内容と人々の実際のニーズとの間にはまだまだ大きなギャップがあります。もっとシンプルな方法で、安全でおいしい空気、水、食べものを確保していくような援助が望ましいと思います。

#### オーストラリアでの緑のアクション

いま、実はわたしはエクアドルには住んでいません(笑) オーストラリアにいます。北東部の小さな町に住んでいます。でも同じような暮らしをしています。

エクアドルはとても美しい素晴らしい国ですが、現在はまだ政治的に安定してません。私は母親として、子どもの安全を考え今はオーストラリアに住んでいます。子どもがもう少し大きくなってからまたエクアドルに戻ろうと考えています。

でも、オーストラリアで生まれ育った私はこの国でもいろいろなアクションに関っています。

今年そして来年と、特に地球温暖化の課題に集中して取り組んでいます。現在、オーストラリア政府は、地球温暖化に対する解決策として原子力発電を推進しています。

オーストラリアでは森の木を伐って日本向けにティッシュペーパーとして輸出しています。実はこちらのほうがよほど地球温暖化を進める原因になっています。

さらに政府はウラン鉱山をどんどん開発しています。原子力発電所の原料として世界に輸出し、外貨を稼ぐためです。オーストラリアは世界的にも自然豊かな場所として知られていますが、でも政府は戦争大好きな上に、京都議定書に反して二酸化炭素もたくさん出しています。そう、この国でやるべきことはいっぱいあるんです。

いっぽう、オーストラリアには環境保護運動のいい伝統があります。草の根の市民パワーです。

今から30年前、タスマニア島で巨大なダム建設を止めるための大きな住民運動がありました。100人以上の人たちがその運動で警察に捕まりました。教師や医師、弁護士、そして地域のお父さん、お母さんといった普通の市民が運動に参加してしました。

その結果ダム建設は中止され、森は守られました。開発予定地だったエリアは今やエコツアーの舞台となり、大きな経済効果を地域にもたらしめています。当時森を守ろうとして監獄に入れられた人たちは、今はヒーローとして扱われています。

この運動は、いっぽうでオーストラリアで最初の「緑の党」をタスマニアに産み出しました。その後、緑の党はオーストラリア各地に広がり、今は国会に議席を持つまでに至っています。

機会があるたび、この緑の党の候補者になるのが私の趣味です(笑) 確かに、選挙で勝つのはなかなか難しい状況です。でも、選挙で人々に新しい選択肢を提供することができるし、今まで決して取り上げられてこなかった問題について、地域の人たちに知らせるチャンスにもなります。なので、私は極力立候補するようにしています。

現在、オーストラリア緑の党は有権者の8～10パーセントほどの支持率を得ている政党に成長しています。

最近、地球温暖化を解決する上で一番優れた政策をとっているのはどの政党かというアンケートが取られました。その結果、48.1パーセントの回答者が「緑の党」と答えています。実に全体の半分です。

でもいっぽうで対テロの政策でいちばん優れているのはどの政党かという質問もありました。緑の党と答えたのは全体の1パーセントでした。

そう、私たちは2つのことを考える必要があります。実は、テロよりも地球温暖化のほうがずっと私たちに対する影響は大きい。これははっきりしています。

温暖化の進行により海岸が削られ、1億人の環境難





民が発生すると言われています。元アメリカ副大統領アル・ゴア主演のドキュメンタリー、「不都合な真実」をぜひ見てください。とてもいい映画です。

「対テロ」の名目で行われたイラク戦争は、実はもっと多くのテロを生み出してしまってます。

来年の選挙には、私は出馬する予定です。私の選挙資金はとっても少ないです。日本円で2万円くらい（笑）前回選挙に出たときは、私の選挙区で私だけが唯一の緑の党からの候補者でした。（会場、拍手）

### 「ナマケモノ倶楽部」の活動

このスローツアーは、「ナマケモノ倶楽部」というNGOで企画しているものです。この団体の“本当”の設立者は、エクアドルにいます。彼は、指が3つしかありません……。そう、森に生きるナマケモノたちです。彼らから私たちは、もっとゆっくりと、シンプルに、優しく生きていこうというメッセージを学ぶことができます。

私と辻信一さん（明治学院大学教員）と中村隆市さん（㈱ウィンドファーム代表）の3人で、ナマケモノ倶楽部の共同代表をしています。「ナマケモノ倶楽部」という名前を聞くと、よく楽しくて笑う人がいます。そう、それが私たちの求めていることなんです。こうした運動は、楽しいものであることがすごく大切なんです。楽しいとき、私たちはそこに自分たちの時間と空間を見つけることができるからです。

ナマケモノ倶楽部の目的は、まさに“ナマケモノ”のように生きることです（笑）。ナマケモノというと、何もせずにだらだらしているといったマイナスイメージがありますよね。

でも本当は、ナマケモノはエコロジカルで、穏やかで、平和的な暮らしのお手本なんです。ショッピングでモノをたくさん買うよりも、携帯電話で話すよりも、お家でゆっくり過ごして、家族や友人とコミュニケーションして楽しく過ごす生きかた。そんな持続可能な暮らし方のモデルなんです。そう、だからナマケモノ倶楽部は環境団体であると同時に、ライフスタイルを考える団体でもあるんです！

私たちの大きな目的は、ナマケモノが暮らし続けていくことができる森を守っていくことです。環境に優しい有機農業を現地で推進したり、そこからできるコーヒーなどの産物をフェアトレードとして日本に輸入したりといった活動を行なっています。

私たちの活動は、上下関係もなくとても水平で、かつクリエイティブです。個人の自発性を大切に、

それぞれが自分のしたいことをやっています。例えば、私たちは「ナマケ」という自前の地域通貨を持っていて、互いの活動の報酬をこのナマケで支払ったりもしています。

またナマケモノ倶楽部の活動を母体にして、「ゆっくり堂」、「スローウォーターカフェ」、「有限会社スロー」といったいくつかの小さな会社生まれています。もともと“ロハス”という言葉は、ナマケモノ倶楽部の活動を通じて辻信一さんたちが日本に紹介し、広めた言葉でした。今ではすっかりメジャーな言葉になりましたね。さらにスロービジネスカンパニー、というスローな仕事やビジネスを日本中に広める活動をしている団体も生まれています。こうした活動は、すべてもうひとつの暮らし方や新たな文化を生み出すためのものです。

また、ナマケモノ倶楽部の活動から“キャンドルナイト”のアイデアが生み出されました。

「10万人のキャンドルナイト」は2003年から始まった運動です。夏至と冬至の日、夜8時から10時の間“でんきを消してキャンドルを灯そう”という呼びかけをしています。

いつか10万人の人が参加してくれたらいいね、ということでこの名がついたのですが、今年はどれくらいの人がこのアクションに参加したかみなさん知ってますか？ 何と、700万人近い人たちが全国で参加しています！

これは、ある種の奇跡です。これは小さなアクションですが、それだけに誰でも参加できます。そして参加した人は、“自分たちにも何かできることがあるんだ！”ということに気付くことができるのです。もちろん、夏至や冬至の日だけでなく、しようと思えば毎日キャンドルナイトをしてもいいわけです。

### GNH（国民総幸福）とハチドリ

ブータンの国王が、あるとき「私たちの国は、GNP（国民総生産）ではなく、GNH（国民総幸福）を中心に発展をします」ということを言いました。つまり国民がどれだけモノを生産し経済発展したかではなく、国民がどれだけ幸せになったかを、国の豊かさを計る指標にしようということです。

ナマケモノ倶楽部では、このGNHの考え方を社会に広めるため、GNHキャンペーンを2006年から行なっています。ブータンからゲストを招聘し全国でスピーキングツアーを行ったほか、私もゲストとして全国でこうしたトークライブを行ってます。

そして、今まさにそのときは来た！ という思いがし

ています。地球温暖化のような深刻な問題に対し、多くの人は2種類の反応をします。1つ目は「否定」的の反応です。そうした事実があること自体を否定し、何も起こっていない、だから聞きたくないと言って無視しようとしています。もう1つは、「絶望」です。私は何もできない、もう遅すぎる、あきらめるしかない、という反応です。

私にとって、このGNHやナマケモノ倶楽部、キャンドルナイトなどの活動は、この「否定」と「絶望」の間にある、「私にも何かできる!」というもうひとつの道です。

例えば、ナマケモノ倶楽部の中から“ハチドリ計画”という新しいキャンペーンも生まれています。このハチドリの話は、私の娘であるパチャが生まれた、エクアドルのコタカチ地方の先住民族、キチュア民族の民話から来ています。とても短くてシンプルな民話なのですが、とても大きな意味を持っています。

歌を歌う前に、私の娘のパチャにこの物語を朗読してもらおうと思います。ちなみにパチャという名前は、キチュア語で「母なる大地」を意味するパチャ・ママという言葉から来ています。また私の息子ヤニは、オーストラリアのアボジニーの言葉で「平和」を意味しています。

#### 「ハチドリ」の物語

あるとき、森が燃えていました。  
森の生きものたちはわれ先にと逃げていきました。

でもクリキンディという名のハチドリだけは、いたりきたり口ばしで水のしづくを一滴ずつ運んでは、火の上に落としていきます。

動物たちがそれを見て「そんなことをしていったい何になるんだ」といって笑います。

クリキンディはこう答えました。  
「私は私にできることをしているの」

#### <質疑応答>

質問者A：アンニャさんは、自分で野菜を作ったり、テレビはあんまり見ないといった生活をされているということですが、実際の暮らしは具体的にどのようにされているのか教えてくださいませんか？

アンニャ氏：夜は早く寝ます。エクアドルでは、電気

がなく文字通り毎日がキャンドルナイトだったので、日が沈んだら寝る生活でした。とてもぐっすり、いい睡眠が取れていました。

オーストラリアでも、基本的に同じような生活を送っています。朝、太陽が昇ると目を覚まし、Eメールをチェックしたり、子どもたちと遊んだり、朝ごはんの準備をしたり、鶏の世話をしたりします。子どもたちが学校に行った後は、家庭菜園で庭いじりをするんですが、決して仕事という感覚ではなく、楽しんでやっています。

また、地域の小学校で、子どもたちにパーマカルチャーを教えるボランティアの先生もしています。パーマカルチャー式の農業は、慣行農業のようにすごく重労働だったり時間やお金がかかるものではありません。手間をかけずに楽しんでやれる農業なので、子どもたちにも喜んでやってもらっています。

毎週のように、パーマカルチャーの無農薬有機の収穫物を家に持って帰って、子どもたちと一緒に楽しんで食べています。完全に自給自足ではないですが、夕食に必ず一品は自宅の無農薬菜園から収穫したものを取り入れています。

オーストラリアは私はエアーという人口7千人の小さな町に住んでますが、そこにあった中古の庭付き住宅を購入して、自分で屋根も壁も修理して、子どもたちと3人で住み始めました。私がまるで、ハチドリのように忙しく働きながら家を修理して畑をつくっているのを見て、町の人たちは笑っていました(笑)

子どもたちとなわとびをして遊んだり、ギターを弾いて歌ったり、鶏を育てたりと、とても楽しい毎日を送っています。都会に住んで環境問題を語っている人たちよりも、この小さな町に住む人たちのほうが、ずっと自然につながった暮らしを送っています。都会の人は、えてして自然のことを語りながらも、どうやって作物を育てたらいいのか知らなかったりしますからね。



いっぽうエクアドルでの生活は、それはもう完璧と言っていいほど環境に優しい暮らしでした。電気もガスも使わず、基本的に自分たちの農園で取れるものだけで暮らしていましたからね。

ただ、エクアドルの生活は、ある意味徹底し過ぎて、自分にはできないと思ってしまう人もいるみたいですね。それに比べると、オーストラリアでは、電気も使うし、お湯もあるし、もっと都市化された“普通”の暮らしをしています。先進国や都市で暮らす人にとっては、より自分たちの生活に取り入れやすかったりすると思うので、こちらでの暮らしの様子をときどきブログに書いてみなさんにシェアするようにしています。

エクアドルでは、ほとんど外から物を買うという必要がなく、自分たちが持ってた物や服だけで充分生活できていました。いっぽうオーストラリアでも、新品のものを買うことはほとんどなく、中古の衣料を買ったり、ごみ捨て場からまだ使えるものを取り出してきて使ったりしています。そうすることによって、環境へのインパクトも抑えられるし、また途上国の工場で児童労働によって作られた安い衣服などを新たに購入する必要もないし、と考えています。

子どもたち2人も、予防接種をしたこともないんですが、至って健康で今のところ大した病気にもかかっていません。ヤニが小さいときに高い熱を出して、1回だけ抗生物質を飲ませたことがありますが、それ以外は特に薬も飲んでいません。

基本はベジタリアンで野菜中心の食生活を心がけていますが、厳格にし過ぎないようにもしています。例えばパーティーに招かれて参加したときに、子どもたちに「お肉は食べちゃダメ！」なんて言って注意したりはしません。

健康の秘訣は、何と言っても日々ポジティブに暮らすこと。子どもたちとの小さな町での暮らしは、本当に楽しくってほとんどストレスがありません。

**質問者B:** 先ほどGNHという考え方を紹介していただきましたが、その指標では日本は世界で何番目なのでしょう？

**アンニャ氏:** GNH指標による順位というものはまだないのですが、各国の幸福度を測った調査結果はあります。それによると、世界一位はデンマークでした。識字率や医療の充実度、福祉制度、また個人の主観による幸福感や生活への満足度、などを総合的にまとめた結果、こうした順位になったそうです。最下位は、アフリカのブルンジでした。

いっぽう日本は18位でした。私は、その結果を見た

ときにとてもショックを受けました。日本は世界で一番お金持ちの工業先進国なのに、この調査では上位に来てなかったからです。この結果からわかるのは、人間の幸せというのはお金が多いか少ないかだけで決まるものではないということです。そしてこれからは、地球環境を壊すことなく幸せになる生き方を見つけることが大切です。

いま日本では、風力や太陽光などの自然エネルギーもじょじょに広がりつつありますし、キャンドルナイトのような、暖かいハートを持った新しい運動が生まれてきています。また、ハチドリキャンペーンのように、必ずしも街頭に出て何かに「反対!」と叫ぶだけでなく、生活の中で自分にできることをしていきましょう、という活動も広がっています。

私はこうした、小さいけれども地道に、継続してみんなが参加できる活動が広がるのが何より大切だと思っています。

**質問者C:** 残念なのは、そういった個人レベルではとても意識の高い方がいらっしゃるんだけど、いっぽう京都議定書で決められた二酸化炭素削減に対しても、日本はむしろ排出量が増えてしまっている。意識の高い人たちに甘えて、企業なんか逆にずうずうしくやられているような気がするんですが。

**アンニャ氏:** 私が思うのは、企業がLOHASブームを利用して、国民の消費をさらに煽ってしまっているということ。これは、かえって環境にマイナスだったりしますよね。

この20年間、日本に関わってきて、私が一番ショックなのは、日本がまだ核開発、つまり原子力を推進しているということ。日本は世界で唯一の被爆国なのにです。

原子力産業には、巨大なお金が投資されています。そのお金を使えば、より電気の消費量を抑えて、かつ新しく再生可能エネルギーを推進していけるはずなのに。

同時に地球温暖化の大きな原因は、森林破壊です。これをまず止めることが、温暖化を防止する上でとても大切です。

**質問者D:** 私自身はロハスブームに疑問があります。本当にそれが環境に良いのか分からないでやってしまってる部分があるんじゃないか、またいわゆる“セレブ”の人たちのものになってしまっているのではないかという点です。これをやれば私はちょっと他の人とは違うわよという、軽い気持ちでファッション的なものでやってしまってる、本質が見えなくなってしまうんじゃないのか。



アンニャ氏：ナマケモノ倶楽部でも、必ずしもロハス商品を買うことが環境にいいわけではなくて、もっと他に方法があるんじゃないか、という提案をしています。つまり、ライフスタイル全体を変えていくということですね。

今年（06年）5月のオーストラリアツアーでも、日本からたくさん飛行機に乗って、温暖化に貢献しながら海外にツアーで行くことが本当にいいんだろうか、ということが議論になりました。それで今わたしたちは、「スローツーリズム宣言」（マニフェスト）というものを作っています。そこでは、エコロジカルなツアーを行うのはもちろんのこと、参加者した人がツアーを通じて本当に“変わる”ということを重視しています。

また、ツアーの催行により私たちが排出する温暖化ガスを少しでも軽減するために、ツアー代金の一部をオーストラリアの森を再生する活動をしている団体「グリーンフリース」に募金しています。しかし企業が、温暖化を促進している言い訳として植林活動を使ってしまうことには問題を感じます。「新しく木を植えれば今ある森林を伐採しても構わない」ということに成りかねないからです。

ナマケモノ倶楽部でもよく冗談をいいます。「スローな社会をつくるために、忙しく働いているのはおかしい！」って。日本は本当に忙しい（笑）オーストラリアは違います。もっとのんびりしています。

大切なのは、答えはわたしたち自身の中にあるということ。外側に指導者や、モデルを求めるのではなく、都市であれ、田舎であれ、新しい社会のありかたを、自分たちで創造していくことが大事だと思っています。

私たちはいま、巨大な“神話”にチャレンジしています。地球には資源が無限にあって、いくらでも使って経済成長して構わないという神話です。その神話のもと、残念ながら今の経済のシステムができてしまっています。その間違ったシステム全体を変えていきたい。これは大きなチャレンジです。

オーストラリアでも、個人のライフスタイルを変えるアクションとともに、政治を変えるアクションをしています。意思決定をする人たちに、次の世代である子どもたちの声を尊重してもらえよう働きかけること。これはとても大切なことです。

例えば、わたしは自分の住む町の役場に「地球環境問題のためにどのような活動をされていますか？」という質問状を送りました。私なりに、とても丁寧に質問したつもりだったのですが、返ってきた回答は恐ろ

しいものでした。「あなたにそんなことを尋ねる資格はない」と！

でも私は、地球温暖化に対し何もしないことのほうが、次の世代の権利を奪っているという意味で、よほど犯罪行為ではないかと思っています。

質問者E：来年から新卒で電機メーカーに就職します。インターネットや携帯電話ってすごい便利で僕も使ってるんですけど、それを仕事で推進していくことは、持続可能な社会とは逆方向に行くんじゃないかなと思って、ちょっと悩んでいます。

アンニャ氏：電機メーカーで働くかどうかというのは、もちろんあなたのチョイスです。

私自身は、コンピューターを環境保全などの活動のコミュニケーションの道具として、地球を守るために活用しています。全てのこうした便利な道具は、私たちがどういう意図でそれを使うかによって変わってきます。実際インターネットによって、私たちの活動は非常に進歩したのです。

何をやるにせよ、ぜひ喜びを持ってそれを行ってください。あなたは、いつでもあなたの生き方を変えることができる。私たちには“自由”があるのです。

質問者F：アンニャさんのご両親がどういう生活信条の方だったのか、知りたいなと思っています。

アンニャ氏：私のお母さんは愛情に溢れた偉大なアーティストでした。そしてとても自立した人でした。お父さんはエンジニアで、やりたいことを何でも実践した人でした。会った人には誰にでも話しかけて友達になる、とてもフレンドリーな人でした。

私が、こんな強い活動家になったので、2人ともちょっとショックでした。でも、いつも私をサポートしてくれました。

10年以上前、私はマレーシアで熱帯林伐採反対のため非暴力運動をし、マレーシア政府によって2ヶ月間留置場に入れられました。そのとき、父はスウェーデ



ンにいて、母はオーストラリアにいたんですけど、2人とも私がやったことを完全に支持してくれて、マスコミにも積極的に出て私をサポートしてくれました。

もし日本で、自分の娘が留置場に入れられたとなったら、それは私の娘じゃないなど言っていて、無視したりコメントしなかったりするかも知れませんよね。でも2人は私を完全にサポートしてくれた。もちろん母は泣いていました。でも、そうした行動をした私をきちんと理解してくれたんです。

実は、最近私の娘のパチャも活動家になったんです。私の家の隣に新しい家主さんがやってきて、庭の木を切っちゃったんですね。するとパチャが「彼を切らないで！ 彼は生きているの！」とお隣さんに向かって叫んだんです（笑）パチャは、自分のハートから自然にそういう行動をしたんですね。

私は、彼女をととても誇りに思いました。私は、子どもたちが、自分の本当の意志に基づいて、地球を癒し、平和のために行動していけることを望んでいます。

#### <講師プロフィール>

#### アンニャ・ライト (Anja Light)

環境活動家、シンガーソングライター

スウェーデンに生まれ、オーストラリアに育つ。10代より環境・反核活動家としてオーストラリア、マレーシア、日本などを中心に活躍。「ディープエコロジー」哲学にもとづく環境教育の実践でも知られる。1999年日本の仲間たちと環境文化NGO「ナマケモノ倶楽部」を結成、以来その世話人をつとめる。現在はオーストラリアで2児の母親業をこなしながら環境活動に取り組む。CDに『Voices for the Forest』、『Pacha Mama』、『Slow Mother Love』がある。

#### [オーストラリア・スローツアー報告]

佐野 淳也（東京学芸大学 環境学習研究員）

#### スローツアーの概要

昨年（2006）年5月に、環境文化NGOの「ナマケモノ倶楽部」主催のスローツアーで、10日間ほどオーストラリアを他の日本人参加者とともに訪ね、主に東海岸側のエコスポットをまわりました。その時、アンニャが現地コーディネーターしてくれたわけです。わざわざツアーのためにマイクロバス用の免許まで取ってくれて。彼女の運転は、時にちょっと怖いときもありましたが（笑）いまから、そのツアーの模様をみなさんに

ご報告したいと思います。

ツアー日程は2006年5月10日から18日まで。「スローツアー」といいながら、次々とエコビレッジやパーマカルチャー農園などを巡る結構忙しいツアーでした（笑）

#### 協同組合のまち、マレーニー

最初に行ったのが、オーストラリア南東部クイーンズランド州にあるマレーニーという人口1万5千人の小さな町でした。かつては不況によって人口が減り、一時は「死んだ町」と呼ばれたこともありましたが、70年代に当時の若者たちが町に移住してまちおこしを始め、今では協同組合と地域通貨のまちとして世界に知られています。

当時大学の講師をしていたジル・ジョーダンという女性とその仲間たちが70年代に町に移住し、協同組合をつくりました。近隣から仕入れた新鮮なオーガニックの野菜やエコロジー雑貨を買うことができるショップを立ち上げました。お米や雑穀、豆など、全て計り売りで買うことができます。余計な包装もなく、シャンプーなども容器を持っていけば必要な分だけ買うことができます。

この生協ショップが始まりになり、町にはたくさんの活動が生まれました。小さい町ながら、個性的なショップがストリートに並んでいます。郊外型の大型店舗の進出が押さえられているのも、こうした地域の商店が元気な理由です。

マレーニーでユニークなのは、こうしたコミュニティ内の起業を支援するクレジットユニオンの存在です。クレジットユニオン（信用組合）は、マレーニーに住む人が何か事業を始めるときに、その事業資金を融資してくれるコミュニティ単位の金融機関です。預金は町の外からも可能ですが、融資はマレーニー内の事業にのみ使われます。

女性や若者も、いいアイデアがあれば自前の資金がなくても、このクレジットユニオンから融資を受けて事業を始めることができます。今のところ貸し倒れはほとんどなく、たくさんのコミュニティビジネスが生まれています。また、地域内の労働力やアイデア、エネルギーを交換しあうLETSシステム（地域通貨）も活発に動いており、これが地域を活性化させ、いまでは多くの移住者をひきつけ人口が増えています。

#### パーマカルチャービレッジ

#### 「クリスタル・ウォーターズ」

次に訪れたのが、マレーニーの郊外、車で30分ほど



行った「クリスタル・ウォーターズ」という自然豊かなエコビレッジです。このコミュニティは、世界で始めてパーマカルチャーの考え方に則って設計された住宅地として知られています。

「パーマカルチャー」は、Permanent（永続的）+ Agriculture（農業）& Culture（文化）を合わせて造られた造語で、「持続可能な農的暮らしのデザイン体系」という意味があります。70年代後半に、オーストラリアのビル・モリソン氏が体系化し紹介したことから世界に広がり、現在では持続可能な発展を目指す多くの地域で取り入れられている考え方です。

クリスタル・ウォーターズはメアリー川の上流に位置し、カモノハシも生息する美しい川の流れがあることから、この名前がつけられました。野生のカンガルーも暮らす広大な土地に、83戸に約200人が暮らしています。住民の職業も建築家や医師、大工さん、コンピューター技師、アーティストなど多種多様です。

各住戸に農園スペースが割り与えられ、それぞれが工夫して環境に優しい建築方法で家を建てて、快適に暮らしています。例えば、湿気を吸ったり保温効果もある土壁を用いたり、冬は太陽光を室内に取り入れ暖めるパッシブ・ソーラーの方法で設計したり、なるべく電力消費を抑さえ、かつ体にも環境にも害のない素材を使っています。

また各住戸に雨水タンクを取り付け、生活用水として利用したり、生ゴミをコンポストで堆肥化したり、太陽光発電器を取り付けるなどの工夫がされています。こうした環境負荷を下げる努力が、入居の際の条件とされています。

パーマカルチャーでは、その土地に人間が住み始める前よりも、住み始めた後のほうが生態系や自然環境が豊かになるようにするべきだと考えられています。クリスタル・ウォーターズも、元は牧草地として開発された土地であり、かつてあった森林が伐採を受けていました。そこで1988年にコミュニティができて以降、じょじょに植林を進め、現在ではかなり森林が再生してきています。

また、住民が共同出資し建設したコミュニティセンターもあり、そこでは毎日曜日には住民が集り会食するサンデーキッチンも行われるなど、住民間のコミュニケーションを促進する工夫もされています。

### ジャランバ・パーマカルチャー村

違ったタイプのエコビレッジも見学しました。ニューサウスウェールズ州のニンビン地区にあるジャラン

バ・パーマカルチャー村です。ここでも日本人の方が家族で住まれています。

クリスタル・ウォーターズに比べると各住戸の間隔が接近しており、また水道が敷設されていなく、電気の使用量も制限されていることから、雨水タンクや太陽光パネルをそれぞれの家が設置していました。

洋子さんという日本人女性の方が、パートナーのナイジェルさん、息子さんのシェーンさんと3人で暮らしているお宅も拝見しました。寒い冬場は薪コンロをキッチンで使われており、単に料理できるだけでなく、煙突からの熱で家中が暖まる仕組みになっています。

また庭には様々な野菜やハーブたちが植えられており、カエルたちが住む人口池も設置されていました。畑の大敵であるナメクジたちをこのカエルが食べてくれるそうです。また庭の外には広々とした草草が広がっていて、時にはカンガルーたちがケンカしたり求愛したりしている様子が見えるのだそうです。

### パーマフォレスト・トラスト

また、パーマフォレスト・トラストという団体が運営している、持続可能な農的暮らしを学べる研修農場も訪問しました。山の中腹部の広大な傾斜地に広がるパーマカルチャー農園では、オーストラリア全土からやってきた若者たちが、堆肥のつくり方や育苗の仕方、作物の育て方などを体験的に学んでました。彼等は数週間からときには数年間という単位で農場に住み込み、共同生活しながら学んでいくそうです。まさに「持続可能な未来に向けた学びのコミュニティ」として機能しており、日本にもこうした体験的学びの場がもっと増えればと感じました。